

2011年度GCOE:コンフリクトの人文学
「研究プロジェクト報告会」

2011年5月14日

コンフリクトマネジメントからみた
言語接触のダイナミクス
—昨年度の実績と最終年度の展望—

大阪大学:工藤真由美、渋谷勝己、白岩宏行、斉藤美穂、
森田耕平、朴秀娟
サンパウロ大学:森幸一、ミュキ照屋、バルバラ稲垣
大阪府立大学:山東功

キーワード

- 沖縄系移民
- 言語接触と言語混交、言語保持と言語シフト
- 生活戦術、教育、二重国籍

ウチナーンチュ ↔ ヤマトンチュ
ウチナーグチ ↔ ヤマトーグチ

- ★ 同郷性に基づく移動と定着という適応過程における沖縄系移民の言語をめぐる状況(普通語の強制、三重の言語生活)
- ★ 文化の差異化を通じての新たなアイデンティティの創出と言語(本土系を凌駕する社会参加、琉球文化復興運動)

永住を目的とした戦後移住者を主な構成メンバーとする
2つの沖縄系移民コミュニティ

1) ブラジル サンパウロ市 ビラ・カロン地区

2) ポリビア オキナワ第1移住地

移動から約60年を経て世代交代が進行しているなか、日本語、沖縄方言（琉球語）、現地語であるポルトガル語やスペイン語に対してどのような使用意識や能力意識を有しているのだろうか、

そしてまた、これらの言語は彼等の生活戦術やアイデンティティとどのように関わっているのだろうか。

ブラジル サンパウロ市 ビラ・カロン地区

ビラ・カロン(Vila Carrão)地区には、本土系の日系人と沖縄系の日系人が居住している。居住者たちは「カロン」「ビラ・カロン」「カロン村」と呼称しているが、その地理的範囲は行政単位としての「カロン」とは必ずしも重なってはおらず、その周辺行政区までを包含するものであり、ビラ・カロン地区に組織された二つの中核的なエスニック組織であるACREC(カロン文化体育協会)とAOVC(沖縄県人会ビラ・カロン支部)の会員の居住範囲を指示する用語として用いられている。

沖縄系移民及びその子弟の移動と定着は、1946年、戦前に旧小禄村からブラジルに移住した一家が移動・定着したのが嚆矢とされる。旧小禄村からのブラジル移民たちは当初、サンパウロ州内陸部のコーヒー農園にコロノ(農村賃金労働者)として導入されたが、戦後、本土日系移民同様にサンパウロ市を中心とする都市部へと移動し、定着を遂げるようになった。

その後、同郷、同門中、親族関係などの基礎的社会関係を利用したチェーンマイグレーションによって、現在では、約1千世帯の沖縄系家族が居住し、サンパウロ市最大の沖縄系人集住地域となっている。2006年度のAOVC会員世帯のうち世帯主の出身地の判明した421世帯に関してみると、那覇市出身が142世帯(33.7%)を占め圧倒的に多いが、その中でも140世帯までが旧小禄村(小禄・田原)出身者である。この意味でビラ・カロン地区は「ブラジルの小禄村」と呼ぶことも可能である。

なお、ビラ・カロン地区には沖縄系日系人、本土系日系人だけでなく、非日系人も混住しており、日常的な非日系人との接触がある。

ボリビア オキナワ第1移住地

ボリビアの国土は、ラパス(La Paz)をふくむ南西部をアンデス山脈が貫き、北東部にはアマゾン上流の平原が広がっている。オキナワ移住地は、東部平原地方の中核都市サンタクルス(Santa Cruz de la Sierra)から北東約40～90kmの地点にある3つの集落(第1・第2・第3移住地)から成る。

オキナワ移住地建設の契機となったのは第2次大戦での沖縄戦による壊滅的被害、戦後引揚者の急増による人口増加および米軍による軍事基地建設に伴う生産基盤の喪失などであり、1954年に第1次移民が入植した。この**琉球政府による計画移民**は1964年までおこなわれ、678世帯3229人が入植。移住者の増加にともない「オキナワ第2・第3移住地」が設立され、現在の沖縄系移民コミュニティは、ほとんど彼らとその子孫によって形成されている。主たる産業は大規模農業である。(なお、定着率が低く、アルゼンチン、サンパウロ、横浜市鶴見、沖縄への再移動も多く見られた。)

オキナワ移住地とは言っても、Camba(東部平原地方のインディオとスペイン人との混血)、Colla(アンデス高地からの移動者)などのボリビア人も多く住んでいる。両者の経済的格差は大きく、一般的な関係は、雇用主＝日本人、農業労働者＝ボリビア人である。沖縄系日系人は上下二重構造の上層にあり、両者は分離的居住にある。

現在の第1移住地の小中学校(日ボ校)では、**スペイン語と日本語による二元的教育体制**に基づく教育が実施されている。日ボ校には高校課程がないために、中学課程卒業後、大多数の生徒は、移住地内にあるサンフランシスコ校やメジスタ校高校課程ではなく、モンテロやサンタクルスなどの都市部の高校課程に下宿しながら(ないし寄宿舎に入って)通学するのが一般的である。しかし、大学に進学する者は相対的に少なく、高校卒業後は家業の農業経営に携わるか、「研修」と呼ばれるデカセギへと出かけるものが多い。

言語生活調査(70項目)と談話録音調査

* 同一調査票(ボリビアではスペイン語)

	項目名		項目名
1	個人的属性1: 社会的属性(全世代共通)	6	日本語能力・方言能力・ポルトガル語能力意識
2	個人的属性2: 言語生活史(1世と2世以下)	7	日本語・方言教育意識
3	家庭での言語使用	8	訪日経験(デカセギ経験)と言語意識
4	メディア・娯楽と言語使用	9	コロニア語・方言をめぐる意識
5	職場・地域社会での言語使用		

言語使用意識と言語能力意識

ビラ・カロンでは2世段階でほぼモノリンガル化

オキナワ移住地では、3世であってもなお日本語保持

【サンパウロ・ビラカロン】

	1世成人→→1世子ども(準2世)→→2世→→3世		
日本語	○	○	×
沖縄方言	○	△	×
ポルトガル語	△	○	○

【ボリビア・オキナワ移住地】

	1世成人→→1世子ども(準1世)→→2世→→3世		
日本語	○	○	○
沖縄方言	○	△	×
スペイン語	△	○	○

モノリンガル化とバイリンガル化

【サンパウロ・ビラカロン】

	1世成人→→1世子ども(準2世)→→2世→→3世		
	日本国籍 商業	日本国籍 商業	ブラジル国籍 商業・事務職・技術職 高学歴・ブラジル公教育重視
日本語	○	○	×
沖縄方言	○	△	×
ポルトガル語	△	○	○

【ボリビア・オキナワ移住地】

	1世成人→→1世子ども(準1世)→→2世→→3世		
	日本国籍 農業	日本国籍 農業	二重国籍 大規模農業・デカセギ(研修) ボリビア人と隔離した二元的教育
日本語	○	○	○
沖縄方言	○	△	×
スペイン語	△	○	○

● **サンパウロ・ピラカロン**

2世に対して、ブラジル国籍を取得させ、ブラジル公教育を重視し、高学歴化に基づくブラジル人としての社会的成功をめざす

● **ボリビア・オキナワ移住地**

2世に対して、日本国籍をも取得させ、ボリビア人と隔離した日ボ校において排他的二元教育を行い、二重国籍という生活戦術による経済的成功(ボリビア人を雇用した大規模農業と日本への長期研修)をめざす。

子どもをブラジル人として育てたピラ・カロンでは、1世成人移民の親と子ども(2世)との会話において、主としてポルトガル語が使用されるのに対して、日本人への帰属意識をもたせて二重国籍としたオキナワ移住地では主として日本語が使用されている。

オキナワ移住地では、大学に進学する者は相対的に少なく、高校卒業後は家業の農業経営に携わるか、「研修」と呼ばれるデカセギ(日本人として入国)へと出かけるものが多い。また、ボリビア人を雇った大規模農業であることから、スペイン語の威信が低い。

※結婚は両者ともウチナーンチュどうしが多い状況。

ボリビア・オキナワ移住地における日本語と沖縄方言の混交
ーウチナーヤマトウグチ(オキナワ日本語)ー

【現地の小学校の先生である「3世の女性(I)」が、手のかかる生徒たちについて語っている談話の一部】

「人名」がね、「人名」が、聞かないわけよ、言うこと。1年生だから、「人名(I自身の名前)」あんまり、あれなんだけど、日直とかチューレー《朝礼》の時とか、たん、たんすって、あの一、本棚の後ろとかに隠れるわけ、もう、ひっぱっても出てこないから、1回ぎゅって押したわけ、そしたら急いで出て来よった。

生徒(「人名」と伏せ字にした人物)が言うことを聞かず、本棚の後ろに隠れていたのを引っばるのではなく押したところ、あわてて出てきたという、自らの体験談を話している。

この「シヨッタ」は、ウチナーヤマトウグチにおける「目撃証言」を表す形式である。また、「ノ(ダ)」ではなく、「ワケ」が使用されている。自らの体験を語るコンテクストで、聞き手の知らない新情報を提示するために頻繁に「ワケ」が使用されている。

サンパウロ・ビラカロンにおける文化の差異化と方言

—ブラジルのウチナーンチュ意識—

—エスニック・アイデンティティの言語的シンボル化—

★大規模な「オキナワ祭り」 沖縄芝居の上演等、方言スピーチコンテスト、ウチナーグチ講座
琉球沖縄文化の継承をめざす

	1世成人 N	1世子供 Y	2世 Y	3世 Y
これから方言を 習いたい				
若い世代が方言を 学ぶのは必要か	Y	Y	本人次第	本人次第
ウチナーンチュなら 方言が話せるのは 当然か	Y	Y	Y	Y/N

理由

- 祖先の言葉を受け継ぐため
- 沖縄文化を守るため、沖縄文化に興味があるから
- 親戚や地域の付き合いに大切、年配者とのコミュニケーションに必要

*「方言を使わないから日本語だけでいい」「ブラジルにいるから」といった意見は少。

今年度の展望

- ・沖縄系移民におけるグローバルストラテジー：単一的な日系移民認識からの脱却
- ・沖縄系移民におけるアイデンティティの葛藤と教育思想
- ・沖縄系移民社会における言語の表象と重層的接触（幻想の単一言語社会）

1. ブラジル・サンパウロ市カロン地区の事例

- ①ブラジルへの沖縄移民の歴史（概観）
- ②「カロン」村の生成と展開過程—ウルクーンチュを中核とした構成—
- ③「カロン」村在住ウルクーンチュの言語生活
- ④「カロン」村在住ウルクーンチュの言語接触の実態

2. ボリビア・沖縄移住地の事例

- ①ボリビアへの沖縄移民の歴史（概観）
- ②沖縄移住地の成立と展開過程
- ③第一移住地在住沖縄系人の言語生活
- ④第一移住地在住沖縄系人の言語接触の実態

.....まとめと補充調査.....

3. 還流する沖縄系人

①再移動の歴史的概観

- ☐ ・アルゼンチン・ブエノスアイレス
- ☐ ・ボリビア・サンタクルス市
- ☐ ・ブラジル・サンパウロ・カロン地区
- ☐ ・米国・ロスアンジェルス
- ☐ ・横浜市鶴見区

②ある一族の移動の物語—知花一族